

トルコ地震観測への文化人類学的アプローチ

An Anthropological Approach to a Seismographic Observatory in Turkey

木村 周平 [1]

Shuhei Kimura[1]

[1] 東大・総合文化・文化人類学

[1] Cultural Anthropology, Univ. of Tokyo

1. 目的

トルコは言わずと知れた地震国であり、地震災害が社会に対してもたらす影響力はきわめて大きい。それだけに近年、地震に関わる科学的な知識や情報への社会的な関心が高まり、社会と科学の関係について考える必要性が増している。本発表では2004年から2005年にかけてトルコの地震観測所で行った現地調査をもとに、トルコにおける地震観測について文化人類学的な分析を示す。

2. 背景

文化人類学は従来、主に小規模な村落共同体において、ローカルな知識や価値観、ものの見方などについて研究してきた。その方法は現地における長期的な参与観察とインタビューであり、その成果はエスノグラフィーと呼ばれる記述的な方法で示される。そのようにして蓄積された研究群が示しているのは、人間社会の多様性であり、また一見すると奇妙に見える慣習的行動が、その社会の歴史的な背景や政治経済的あるいは文化的脈絡のなかでは理解可能であり、場合によっては合理的ですらある、ということである。

近年は、そこで得られた知見や研究手法を用いて現代社会における小規模な「場」に取り組む研究が急速に増加している。そうした研究群が焦点のひとつとしているのが科学技術の急速な発展であり、それぞれの社会での受容や文化に与える影響に加えて、科学技術を生み出している場における技能やローカルな知識などについて、科学の実験室や病院、あるいは工場などにおける調査から研究が進められている。発表者が調査地であるトルコにおいて地震観測所の調査を行ったのも、そうした近年の人類学の蓄積が背景にある。

3. 調査対象

本調査の対象である観測所は気象庁のような公的機関に代わり、トルコにおける地震の情報を発信する役割をもつ。スタッフ数は22人、そのうち雑務をおこなう1人を除いた21人（ほとんどは地球物理学科の学部卒）が、24時間体制（昼間は2人当番、夜間や休日は1人）で地震観測を行っていた。当時地震計は国内に110台程度配置されていたが、その設置場所の決定やメンテナンスもスタッフが中心になって行っていた。発表者はスタッフに対してインタビューを行い、また地震観測の現場における観察を行った。

4. 結果と考察

そこから明らかになったのは、以下のことである。

1) 地震観測にまつわる技能の存在：トルコの地震観測ネットワークにおいては、スタッフの介入する領域が大きい。スタッフはデータの「ノイズ」を減らし、より正確な数値を出すために、様々な知識と技能を動員して観測と解析を行う。そうした知識や技能は、トルコの政治経済や歴史的な経緯を背景に、現在のように作りあげられたトルコにおける地震観測のネットワークに固有のものを含んでいる。

2) 技能の習得におけるスタッフの協働：知識や技能の重要性にもかかわらず、この観測所では、新人スタッフに対する研修は特には行っていない。しかし、スタッフの日常的な協働によって観測と解析に必要な知識と技能の共有が図られている。この観測所ではスタッフの間のヒエラルキーがあまりなく、また食事会などで「コミュニティ」的な雰囲気を作り出し、スタッフ間の信頼感を醸成することで情報の共有がうまくいっていた。

3) 技能の存在の多様な効果：観測所は地震に対する情報を発信しているため、社会的には地震学として最も身近な存在である。しかし、観測に特化していることで、地震学内部では技官として扱われることも少なくなく、それに対してスタッフはことさらに技能が地震学者という専門性に基づくものであることを強調しようとするなど、アイデンティティの問題を抱えている。これはスタッフのキャリアパスにも影響を与えている。

4) 「科学」の多様な意味：この3)が示すのは、この観測所を取り巻く様々な視点から見たとき、「科学」というものが多様な意味を持たされているということである。そしてそれは現場においては相互に絡み合っている。こうした意味を明らかにすることは、科学と社会の関係を考える上できわめて重要だといえるだろう。